

書 評

Kathleen Blake, *Pleasures of Benthamism: Victorian Literature, Utility, Political Economy*
(Oxford: Oxford University Press, 2009)

田 中 裕 介

キャスリーン・ブレイク『ベンサム主義の快樂』の意図は、一見したところ最近の研究動向に従順であるように思われるかもしれない。北米のヴィクトリア朝研究においてここ十年来豊かな成果を産み出している（2006年刊行のキャサリン・ギャラガー『ボディ・エコノミック』をその代表的業績とすることにあまり異論は出ないと思われる）、ニュー・ヒストリシズムの延長線上で経済と金融の観点からヴィクトリア時代の小説と思想のテキストを連関させて読むという流れを踏まえて、ディケンズ、エリオット、トロロープ、ギaskellの小説の読解を、スミス、ベンサム、リカード、ジェイムズ・ミルからジョン・スチュアート・ミルにいたる政治・経済思想のテキストの読解と重ね合わせることで、ヴィクトリア時代の文学と思想に通底するひとつの知の文脈を浮かび上がらせようとするのが本書だ。その文脈とはつまりポリティカル・エコノミーの思潮であり功利主義思想である。そうだとすれば新発見の目覚ましきはここにはないと言えそうだが、それは皮相な感想であって、まず重要であるのは、本書が単に功利主義思想の表れを小説の表層に見出す水準にとどまっていない点である。

ヴィクトリア時代を扱う歴史書では、ディケンズ『ハード・タイムズ』に登場するグラッドグラインドという教育者が、その「事実、事実、事実」という格好のセリフとともに言及されて、当時の功利主義的な風潮をディケンズが批判の対象にしたとよく言われる。歴史記述のこの種の文学テキストの理解と対をなすように、文学研究の側でもその歴史の扱いにおいてこの水準と大差ないことも多く、ひとつはニュー・ヒストリシズム以前の強固な作家

主義的、作品主義的枠組みを保持する限界のゆえに、『オリヴァー・トゥイスト』に新救貧法批判のみを、『ハード・タイムズ』に功利主義的教育批判のみを読み取る水準とさして変わらない場合がままあるように思える。

それでは本書でブレイクは『ハード・タイムズ』をどのように解釈するのか。第2章の66ページから68ページの論述を見ることにしよう。彼女はまず、この小説においてグラッドグラインドの学校の対極をなす「サーカス」が、コークタウンという架空の新興工業都市の産業資本主義に対する理想として導入されているのではなく、娯楽を提供する商売である点でそのいかがわしい類似物であると規定する先行研究に同意した上で、一方その産業資本主義への否定的見解に異議を突きつける。同時にディケンズを功利主義批判者という線で論じるパトリック・ブラントリンガー、さらにはサーカスの仕事を重労働として記述することで「陰鬱な」ベンサム的労働倫理を「意図に反して」支持してしまっていると記すギャラガーに対して、著者はディケンズがむしろ功利主義者として「ベンサム主義の快楽」を小説で伝えていると論じる。ブレイクは「自己の抱えているもっとも汚いものをさほど悪くないものとして捉える」という言葉でこの小説におけるディケンズの教えを要約する。そしてアダム・スミス以来のポリティカル・エコノミーの文脈を参照して、その自己の利益や娯楽を追い求める欲望が全体の社会に益をもたらす点で肯定されるべきものであったという論点を引き出すと、さらに続けて、ベンサムにおいて「快楽」への志向として明確に把握された功利主義的な原理が、『ハード・タイムズ』という作品全体に浸透しているという意見を提示するのである。この小説は、功利主義批判であるどころか、グラッドグラインドの科学重視教育の欠損をスリーリーのサーカスという娯楽が補完することを通して、全体として「快楽」に満ちた功利主義の世界像を伝えているのである。小説の読み直しと、スミスからベンサムへいたる思想テキストの再解釈を一息で遂行する見事な論述の組み立てとっていい。

ブレイクは、ヴィクトリア朝社会の主潮であった功利主義、産業主義、資本主義、自由主義に対立するとこれまで主として見なされてきた文学と思想のテキストが、むしろそれらに加担していたという立場をとる。それ以上に重要であるのは、その加担を意図せざる悪として糾弾するのではなく、そこに見られる功利主義の「快楽」を積極的に評価する態度を示していることで

ある。これが私にとって啓示的な視点であったのは、従来のヴィクトリア朝小説研究に内在する意図せざる保守性（批判的先進性の装いをもった保守性のこと。居直りの保守性はむしろ魅力的である、研究の場以外では）を照射する効果をもたらしてくれたからである。25ページから31ページにかけての記述で著者はその辺りの事情を簡明に伝えている。ブレイクはまず、なぜ『荒涼館』がこれまで功利主義批判の書として捉えられてきたのかという問いを呈する。そしてその問いに自答する過程で、ヴィクトリア朝文学研究が、ポストモダン時代においても、リーヴィス以来の伝統に即するかたちで、資本主義と一体化していたリベラルなブルジョワ的価値観に対するイデオロギー批判の傾向をもってたと指摘する。多くのヴィクトリア時代の作家が当時の新たな産業時代に対する「反革命」に加わっていたという共通理解が残存しているのであり、研究対象が内包していた（とされる）この批判的観点が現在の先端的なヴィクトリア朝文学研究にも確かに浸透しているのである。そして基本的にこの範疇からギャラガーの『ハード・タイムズ』論も、D・A・ミラーの『荒涼館』論も脱し得てはいないと彼女は捉えるのだ。

ミラーは、ディケンズが『荒涼館』でパノプティコン的権力装置としての大法院を標的としている一方、最終的には功利主義的社会観から解放されているとはいいがたくその批判対象と共犯関係を結んでいると論じる（『小説と警察』）。ブレイクはミラーの提示したマイナス評価をそのままプラス評価へと転じてみせる。ミラーに対する、そして彼が依拠するフーコー——言うまでもなくベンサムのパノプティコンに陰鬱なイメージを一方向的に与えた——に対する彼女の挑戦は、小説中のデッドロック家に象徴される大土地所有貴族の権力が世紀後半にいたるまで維持されたという歴史的事実をひとつの拠り所としている。ヴィクトリア時代中期の社会をリベラルな中流階級的イデオロギーが支配していたという意見は一面的であり（これ自体はすでにパム・モリスによる指摘があるが）、むしろ功利主義的価値観こそが改革の力として社会的に機能していたという観点にブレイクは基づき、旧来の支配体制としての大法院とデッドロック家を転覆する力を小説のなかに読み取り、それを「ベンサム主義の快樂」として捉え直すのである。この読解に従えば、主人公エスターも、功利主義の精神圏に属するのであり、自己利益を追求する人物として（ただしもちろん肯定的に）位置づけられるのである。

ヴィクトリア時代の文学を同時代の中流階級イデオロギーへの批判として捉えるか、さもなくば作家の意に反してそれに染まっていると糾弾するしかなかった主流の文学研究の見えない規制の枠組みを炙り出す本書は、必然的に、功利主義、産業主義、自由主義、資本主義を顕揚するのだが、その論の組み立てにしたがって、第7章においては帝国主義にさえも、インド経験の深かったミル父子のインド社会論に即して「リベラル・インペリアルイズム」として明るい光を当ててみせる。インド経験をイギリス人が柔軟にアイルランドの施政に、さらにイギリス本国の体制改革に採り入れた事実を、テキストの細密な読みに基づいて論じるその立論は、きわめて刺激的だ。いまだフォーコーだけでなくサイドの大きな影のもとにある一部の北米の文学研究の方法論を挑発的に回避しようとするその態度は痛快ともいえる。カーライルの労働観にあえて快樂原理を読み取る第3章の論述も冴えている。第5章では、ミルが『自由論』においては、ベンサム思想に従い自由という概念を効用のための手段として捉えていたが、次第に自由それ自体を効用として説く立場に移行したと論じる視点が参考になっただけでなく、第2章のベンサム読解と同じように思想書を文学書のように味読するエレガントな叙述を堪能した。綿織物産業の勃興と伝播をめぐる歴史的記述を織り込みながらギヤスケルとタゴールの小説を重ね合わせて論じる第6章の構成もきわめて洗練されている。

しかしながらこのエレガンスは両刃の剣のようでもある。「ベンサム主義の快樂」の表現のひとつとして「自己の抱えているもっとも汚いものをさほど悪くないものとして捉える」という言い回しを用いる著者の方法論には、本書の中心概念が「効用」であるかぎり、「悪」を「善」へと転用するというロジックが組み込まれている。確かにヴィクトリア時代の多くの小説は、単純な善悪二元論を出ないためにその枠内で処理することは可能だろうが、たとえば本書冒頭で扱われているディケンズの小説世界に満ち満ちている、ドストエフスキーさえをも震撼させた、必ずしも善の対立項ではない絶対的な悪と切り結ぼうとするならば刃がぼれが生じそうである（その一元的世界観を批判されたミラーと正反対の限界をもってしまったといえようか）。著者があっさり功利主義と並列する資本主義、さらにはリベラリズムの歴史的多様性も、この枠組みにおいては必然的に扱いかねるだろう。かくしてあえてイ

デオロギー批判を回避するブレイクの戦略的単純さは、旧来の素朴なブルジョワ的世界観と欠点を共有することになっており、同時に古きよき世界にはあったはずの享樂的な豊饒さ（たとえばピーター・ゲイの浩瀚なヴィクトリア朝ブルジョワジー研究に満ち溢れているような）から隔てられているのではないか。もっともラブレーもバルザックも存在せず、ディケンズが突出した例外と考えられなくもない19世紀イギリスにおける「快樂」を伝えるのには、本書のほどよく端正な論述こそがふさわしいとも言えるのかもしれない。